
あの頃のように、もう一度

未知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃のように、もう一度

【Nコード】

N1378W

【作者名】

未知

【あらすじ】

快斗と青子はクラスメートの前でいつもの痴話喧嘩をしていた。もう慣れっこになっていたので皆は見守った。

けれど・・・その日の喧嘩はいつもとは違った。

「快斗と幼馴染なんて迷惑よ!!」

「こつちだつてオメーと幼馴染なんてゴメンだね!!」

この日から2人は名字＋君・さん付けで呼ぶように・・・

数日後、快斗に青子が・・・

「ありがとう、快斗」

そして翌日から青子は学校を無断で欠席し、行方不明に。さらに、蘭まで行方不明になってしまった！！

浮かび上がったのは“連続女子高生誘拐事件”

「いいのですか？彼女を探さなくて」

「もう俺にその資格は無い」

「ら〜〜〜ん！！！」

「蘭ちゃんが行方不明ってほんとなん！？」

「工藤・・・」

しかし、皆の想いとは裏腹に、彼女達是最悪の選択を選ぶ。両親・親友・そして自分の幼馴染のために。

「それで皆が助かるのなら・・・」

「バイバイ・・・新一、コナン君」

「さようなら・・・快斗」

果たして蘭と青子は生きて帰ってこれるのか！？

そして、快斗と青子はあの頃のように戻ることができるのか！？

プロローグ（前書き）

この物語は主に快青&コ蘭（新蘭）になると思います。
あんまり平和は登場しない気がします。

また、この話では、コナンはまだ新一に戻ってはいません。

ブローグ

「おっはよー！！快斗」

「おはよう、青子」

いつもどりの朝、いつもと変わらない幼馴染の声。

これからも、変わらないと思っていたのに。

いつものことから、気づけなかった。

―彼が何を思っていたのか―

もし、分かっていたら。

そのポーカーフェイスで隠された心の中を気づくことができた
こんな事にはならなかったのかも知れない。

けれど、もう遅い

過去を振り返ったって、何も変わらない。

出会いが偶然なら、別れは必然

この日を境に2人は変わっていった

一人は時の流れに逆らえない。それを無理矢理擦じ枉げようとするれば人は罰を受けるからー

いつもの喧嘩（前書き）

恵 桃井恵子

青 中森青子

快 黒羽快斗

ク クラスメート

ク男 クラスの男子

とゆう意味です！

いつもの喧嘩

〔江古田高校2年B組〕

恵「おはよー！青子！」

青「おはようー！！恵子」

ク男「おーおー！！朝っぱらから夫婦で登校かあ？」

ク男「随分と仲がよろしいようで」

ク男「すげーすげー！！」

快「あのなあ・・・」

快青「そなんじゃねーよ（ないわよ）！！」

青「夫婦じゃなくて、幼馴染！！ってかなんでバ快斗と夫婦なのー！！？」

快「またバ快斗つつたな！？アホ子！！」

青「青子はアホ子じゃないもん！！バ快斗！」

快「アホ子じゃないならお子様だー！！」

青「だからお子様じゃない!!」

快「どーみてもお子様だろ!このお子様アホ子!!」

青「なっ・・・なんですって!!!!このバ快斗!バ快斗のほう
がお子様じゃない!」

快「あんだと!!!!」

青「なによ!!!!」

ク(また始まったよ・・・夫婦喧嘩・・・)

ここまでは、いつもの喧嘩だった。

いつもなら、ここで普通に終わるのに・・・

今日は違ったんだ。

いつもの喧嘩（後書き）

夏休みの宿題をまだ終わらせてない、アホな未知です
（しかも、中3で受験生。自覚ナシです。）

やっぱり、最後のほうにならないとやる気出ないんですよ〜
笑）

なので毎年8月31日は徹夜です。

感想・ダメだし等、よろしく願います！

亀裂（前書き）

探 白馬探

赤 小泉赤子

デス

それでは本文をどうぞ。

亀裂

5分間経つても2人の痴話喧嘩は収まらず、そればかりかだんだんエスカレートしていった。

快「何だところ！このマヌケ！！！」

青「な……このバカ！！！」

快「あんだと！？オメーなんかに言われたくねえ！！！」

青「バカじゃなかったらボケよ！！！！このバ快斗！！！」

快「俺はボケてねーぞ！！！！このアホ！！！」

青「充分ボケてるわよ！！！！今日だって上の空だったし！！ボケ！！！」

快「あれは……………」

青「ほら、言えないんじゃない！！！」

快（明後日の仕事について考えていたなんて言えるかよ。あゝ寝みい……こいつ……人の気も知らないで……）

この時、初めて快斗は青子の前で普通のポーカーフェイスをするのをやめた。

夜に月下の奇術師として活動している快斗は不足している睡眠時間を補うために毎日授業中寝ているのだが、青子からキッドの悪口を言われるわー授業中寝てるのをわーわー言われるわで疲れが溜まっていたのだ。

快（もうどうでもいいや。疲れた。これ以上わーわー言われるのはもう御免だ・・・）

もう今まで保ってきた幼馴染との関係もどうでもいいと思っ
てしまった。

快「うるせーよ。別に青子には関係ねーだろ。」

普段からは想像できない低い声で吐き捨てる快斗

青「え・・・・・・・・？」

ク「！！！」

クラスメートは普段明るく温厚な快斗が変貌したことに啞然としている。

それだけ、今の快斗の表情は怒りにみちていた。

探赤（黒羽君・・・・・・・・それがキミの本心ですか（なの）・・・・・・・・？）

唯一、探と赤子だけは今の言葉が快斗の本心だとゆうことに気づいたが、他のクラスメートは気づかなかった。

亀裂（後書き）

一日に2話投稿しました！

次話はとうとう快斗と青子が・・・？

次回もよろしく願いします！！
それでは

崩壊（前書き）

快斗&青子のキャラが違う気がします・・・。

でも、最後はいつのも2人に戻るの・・・。

崩壊

青ク「・・・・・・・・・・」

クラス中が沈黙の空気に包まれる。

暫くして、沈黙を破ったのは青子だった。

青「・・・・・・・・関係・・・・・・・・ない・・・・・・・・？」

もう限界だった。今まで誰にも吐かなかった言葉を大切だと思っていた幼馴染に向けて発した

快「ああ・・・そうだよ。別にオメーにはカンケーねーだろ！？いちいち口出しすんなよ！迷惑なんだよ！！」

ク「！！！！！！」

探赤（黒羽君・・・）

呆然としているクラスメートとは裏腹に、快斗の夜の顔を知っている2人はポーカーフェイスを保っている

赤探（中森さんはどうするの（でしょう）？）

青「・・・迷惑で悪かったわね。」

青「・・・快斗はずっとそう思ってたんだ・・・分かった。もう快斗には近づかない・・・必要最低限以外喋らない・・・これでいいでしょ？」

ク「！！！！！！嘘だろ・・・??」

青「恵子、青子早退する。先生には欠席って言うといて・・・」

青子はそう言うと、自分の席から鞆を取り、

青「じゃーねー、恵子ゝみんなゝ・・・あと、“黒羽君”」

青子は泣きもせず、平然といつもより低い声で言い放った。

ク「!?!」

クラスメートは青子の発言に啞然とし、

探赤（中森さん・・・・・・・・）

探と赤子は驚いていた。

快「ああ・・・じゃーな、“中森さん”」

ク「え・・・!?!」

快「俺も帰るわー。じゃーなー!!」

青子が教室を出て行った後、快斗はクラスメイトに“イツモノ笑顔”で言って教室を後にした。

青子と快斗が居なくなった教室は重苦しい雰囲気が漂っていた。

それは、先生が教室に入ってくるまで続いた

崩壊（後書き）

感想・評価、よろしくお願いします!!

2011・8・26・Friday

未知

流れなかった滴

く青子く（前書き）

今回は青子1人称です。

流れなかった滴

「青子」

学校を早退（欠席）してきてしまったため、青子は通学途中にある土手で少し時間を潰すことにした。

土手に着くと、太陽の光が反射して川の水面が光り輝いていた

今の青子の心とは真逆

適当な所に腰を下ろすと青子はぼーっと光り輝く水面を見た。

「綺麗だなあ……」

思わず出てきた言葉。今の自分がまだこんなことを言えることに驚く。

青子は数十分前の出来事をもう一度振り返ってみることにした。

あの時の変貌した幼馴染に言われた言葉が離れない

（迷惑……かぁ……確かにそうだね……）

今まで感じたことがなかった。

いつも隣に居るのが当たり前になっていた幼馴染。

でも私は快斗のことを何一つ解っていなかった。

いや……解ろうとしなかった。

快斗のことは自分が一番分かっていると思っていたから。

その驕りが今という状況を作ったんだ

(ほんとに馬鹿だなあ……青子が全部悪いんじゃない……)

快斗が自分に迷惑と言ったとき、自然と涙は流れてこなかった。

それどころかなんとも思わなかった。

気づいたら反論してて……いつもより低い声で快斗を初めて苗字＋君付けで呼んでいた

そのことにも、何にも感じなかった。

そして、居心地が悪かったから早退して・・・

でも快斗を観たくなかっただけ・・・

結局現実から逃げているのは自分。

・

快斗ともう一緒に居れないのはショックのはずなのに・・・

涙は流れない・・・

そればかりか・・・

仲直りしたいとも思わなかった・・・

んだ

幼馴染という名のキズナはそれだけとても脆いものだった

流れなかった滴

く青子く（後書き）

5話目投稿終了です

初めての1人称だったので、いろいろ苦労しました。

途中から訳解なくなっちゃいました・・・←←

1人称ってこんなにも難しいんですね・・・

さて、今回は快斗サイドを書くつもりです。

次回もよろしくお願いします！

それでは

未知

流れなかった滴

く快斗く（前書き）

快斗サイド

流れなかった滴　　く快斗く

青子と同じく早退（欠席）した快斗は家に帰るために通い慣れた通学路を通っていた。

（そーいやー今日予告状出さねーとなー）

彼の脳内に先程の“青子との喧嘩”は微塵もなかった。

3日後を予定しているため、今日辺り予告状を出さなければならぬ。

いや、出さなくてもいいのだが、月下の奇術師としてのプライドが許さない。

（そーいやー今度は名探偵来れるかな。あいつが居ねーとやっぱり張り合いがねーんだよね。・・・）

2週間前に快斗がキッドとして仕事をした時、名探偵こと江戸川コナンは現場に來なかつた。

やはり、中森警部だと張り合いが無い。快斗にとってコナンが居ないと面白くなかつた。

（ゲ……そーいえば、白馬のヤローが居るじゃねーか……今回絶対来るだろーな……。ハア……。なんか大変なことになりそうだな）

コナンが來なくても探が今は居ることに気づいた快斗

探は快斗がキッドとして活動した翌日にイギリスから帰国してきた。

探はキッドが快斗であることを知っている。（快斗本人は否定しているが）

彼も偽小学生のコナンと同等の推理力を持ち合わせているため、2人が同時に攻めてきたらと思うと、さすがの快斗も溜息がでる。

（こりゃ．．．いつもの何倍もの逃走経路を確保しとかねーとやべーかもな．．．．．）

そう思いつつ歩いていると快斗は見慣れている土手の所に来ていた。

（え．．．．．？）

彼は驚いて足を止めた。土手の左側の方にセーラー服を身に纏ったちよつと癖のある長い黒髪の少女が座っていたからだ。

（青子．．．．．？）

見慣れた髪型・髪の色・後姿・雰囲気．．．．．

見間違えるはずがナイ

声を掛けようとして、止めた

今日の青子とのやり取りを思い出してしまったから・・・

あの時、俺は大切に思っていたはずの幼馴染に初めてあんなことを言ってしまった

あいつとのキズナももうどーなってもいいと思った

怒りに身を任せて、気が付いたら思っていたことを青子に吐き

捨てていた

クラスメートは皆驚いていたみたいだった・・・

当たり前か・・・

俺が皆の前であんなこと言ったの初めてだもんな・・・

白馬と小泉はポーカーフェイスだったけど・・・

正直、俺は青子は泣くと思っていた

けれど、あいつは泣くどころか俺に平然と言い返していた

さらに、俺のことを苗字＋君付けで呼んできた

気づいたら、俺も・・・青子のことを・・・

苗字+さん付けで呼んでたんだ・・・

もう青子の隣に居れないのはショックのハズなのに・・・

そのことに、なんとも思わない自分が居る

それどころか・・・

全然涙は流れてこない・・・

ホッとしている自分が居た

もう青子の愚痴を聞かなくていいんだと・・・

トキガナガレルトドウジニヒトハカワツテイク

ヨノナカニゼツタイナンテアルハズガナインダ

流れなかった滴 〽快斗〽（後書き）

なんか、話がグダグダ・・・

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます!!

次回もよろしくです。

壊れ行く日常

（翌日）

江古田高校2年B組みは、快斗と青子以外のメンバーが集まっていた。

隣のA組とC組からは笑い声や話し声がして騒がしいのだが、このクラスは時間が停まったように静かであった。

その原因は昨日の幼馴染の男女の度が過ぎた喧嘩。

皆は『今日はもう元に戻っている』と信じて快斗と青子を待つ。

先に教室に入ってきたのは、青子だった。

恵「おはよう・・・青子」

青「おはよう！恵子♪今日なんか暗いね。どうかしたの？」

恵「ううん・・・何でもないよ。」

青「そっかぁ・・・良かった♪」

いつもと変わらない青子の反応に思わずホッと
するクラスメー
ト。

ク女（良かった・・・青子は変わってない・・・）

ク男（快斗はどうだろうか・・・）

・・・数分後・・・

「おっはようー！」

元気な声が教室中に響く

ク男「おはよう、快斗」

快「はよ。」

こちらも雰囲気はいつもの快斗だった。

ク男（快斗も大丈夫そうだな。）

ク女（大丈夫そうね・・・）

お互いに頷きあった皆は恒例の普段と変わらない茶化しをすることにした。

ク男「今日は一緒に来なかったのかあ？お2人さん」

1人の男子が快斗と青子に言葉を投げかけると、

快青「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・?」

訳分かんないと言つような言葉が返ってきた。

ク男「今までお前ら一緒に仲良く来てただろ?」

青「・・・・・・・・・・冗談は止めてよ。青子と黒羽君が?それ、何かの間違いなんじゃない??」

青子はさも可笑しそうに笑いながら言った。

ク「・・・・・・・・・・へ・・・・・・・・?」

快「そうだぜ!そんな冗談詰まんねーって!もうちつとマシなのにしろよな」(笑)

ク「!?!」

皆呆氣にとられてしまった。なんとか我に返った恵子が2人に問う。

恵「・・・・・・・・青子・・・・・・・・快斗君・・・・・・・・それ、本気で言ってるの?」

青「・・・本気もなにも・・・」

快青「事実だろ（でしょ）？」

ク「!!!!!!」

快斗と青子の発言に、言葉を失ったクラスメート。

目の前に居る2人は・・・

ホントウニカイトトアオコ・・・???

できることなら・・・否定したい・・・

彼方達は・・・黒羽快斗と中森青子ではないと・・・

でも・・・

目の前に居る2人が自分達に向けている笑顔は・・・

今までの2人と・・・

―同じだった―

壊れ行く日常（後書き）

とうとう夏休み最終日……

平次「宿題終わったんか……？」

未知「……………」

新一「その様子だと終わってねーな……」

未知「……はい……………」

快斗「ドンマイ」俺、初日に全部終わらしたから」

新一「俺もー」

平次「俺もやでー」

未知「うつ……………いつも寝てるくせに……」

平次「おい！俺は寝とらんぞ！！工藤と黒羽と一緒にすんなや！！」

新一「おい、それどーゆー意味だ！！」

快斗「まあまあ……………」

未知「それでは今回はこれまでで……」

平次「なんやとー！ー！！！」

新一「ああ？？」

未知「あ……まだやってる。」

快斗「……ガキだな……」(小声)

新平「おいこら……何か言ったか？快斗(黒羽)……」

快斗「聞き間違えじゃん？」

次回もよろしくお願いします!!

それでは 未知

変わっていく2人（前書き）

今回は、探・青子・快斗の気持ちについてです。

それぞれ探 said・青子 said・快斗 said になっています。

変わっていく2人

（探 said）

その後、黒羽君は屋上にサボリに行きました。

青子さんは教室で桃井さん達と話をしています。

僕は・・・数分前の出来事について、もう一度考えてみました。

あの時の黒羽君と中森さんはいつもと違っていました。

一緒に来なかったどころか・・・

2人していつも一緒に来ていたことを否定してました・・・

まるで・・・

自分達は“ただのクラスメート”なんだと・・・

クラスの皆さんは啞然としてましたね。

僕も啞然とまではいかないけれど、本当に驚きました。

それに、その時の2人が僕達に向けた笑みはいつもと変わらないと思えるが、心からは笑っていなかった。“表面上の笑顔”に過ぎなかった。

あんなに喧嘩してもすぐに仲直りしているあの2人が・・・

お互いがお互いを想って、夫婦同然の幼馴染の2人が・・・

信じあっている2人が……

クラスの皆にさんざん茶化されて、その都度少し赤くなりなりながらも声を揃えて自分達に反論してきた黒羽君と中森さんが……

たった一日で変わってしまったことに……

く青子 said く

あの時、普通に言葉が出てきた。自分でも驚くほど自然に……

やっぱり、あれが青子の本心なのかな……？

もう今の青子は……

昨日までの青子ではないんだ・・・

何かを吹っ切ることってこんなにも簡単なんだね・・・

信頼できる関係を築くのは何年もかかるのに・・・

それをぶち壊すのは、一瞬なんだ・・・

しかも、その内容はとても些細なこと・・・

ごめんね．．．．．お父さん

ごめんね？皆．．．

そして、

快斗．．．．．

自分の心の変化に気づいてしまったから・・・

時が経てば・・・

ー人は変わるんだー

モウイママデのアオコニデハナイ

く快斗saidく

授業をサボるためと、1人になりたいために、快斗は屋上に来ている。

授業中は勿論、休み時間もめったに生徒が来ないこの場所はサボリ

に使える快斗のお気に入り場所でもある。

いつものように寝転がり、空を見上げる

澄んだ青空と、ところどころに散らばる白い雲

これを見る度に思う

雲は自由でいいな……と。

青子がクラスで俺との関係を何かの間違いだと言ったとき、何かが切れた。

どーせなら・・・と思い、俺も青子の言葉に便乗した。

青子が仲直りしない気なら・・・

俺も青子とは仲直りしない。

その方が、愚痴を聞かなくていいから気が楽なのだ。

もう終わりだ．．．．．青子．．．．．

じゃーな．．．

変わっていく2人（後書き）

なんかグタグタ・・・

しかも、あんまり進展していません。

そろそろキッド編になっていくと思います。

それでは、次回もよろしく願いします！！

キッドの予告状（前書き）

2ヶ月以上も更新していませんでした・・。

すみません。

キッドの予告状

「なにい~~~~~~~~!!!!!!」

快斗と青子が高校に居るとき、警視庁捜査二課のフロアでは、ある警部の大声が響いていた。

その警部の半径10m以内に居る人はとっさに耳を塞ぐが、それを徹りこしてガンガン響いてくる。

暫くの間、多くの刑事が耳鳴りの餌食となり、その場を動けずにいた。

「キッドから予告状がきただどどどど！？」

「はっ、はい！！」

「どれだ！！」

「こっ・・・これです！」

さっきの大声は、キッド専任の中森銀三警部が出した声である。

部下が持ってきた“怪盗キッドからの予告状”をひったくるようにとり、まじまじと見つめる。

親愛なる中森警部へ

頂きに参上する。

明日、午後9時30分に“ブルーパール”を

怪盗キッド

・・・そう予告状には書かれていた。

怪盗キッドの名の後には、お馴染のキッドのイラストが描かれている。

中「明日の9時30分か・・・。それにしても今回はストレートすぎないか?」

刑「そうですか・・・?」

刑「でも予告状はキッドのモノですよ?」

いつもは暗号で送られてくる予告状

しかし、今回に限ってはストレートすぎる文である。

もっとも、快斗がめんどくさがってこうなったのだが。

別に今回はいつか・・・と思って書いたため、すごくストレートな文になってしまった。

中「よし！対策をたてるぞー！！」

刑「s」「はいっ！！」「」

この予告状が本物であると感じた中森警部は、部下と共に明日

の対策を練るのであった。

キッドの予告状（後書き）

2ヶ月以上も更新していないのに、すごく駄目文ですね。

K i dの予告状、全く浮かびませんでした。

すみません。

受験が終わるまで暫くこの状態は続くとおもいます。

でも未完にするつもりはありませんので。

では読んでくださった方々、ありがとうございます。

2 0 1 1 ・ 1 1 ・ 1 3 S u n d a y

未知

白き罪人と蒼き宝石　くバレた正体く（前書き）

今回は、キッドが宝石を盗んだ後の話です。

キッドVSコナン＆探　の話を待っていた方・・・

本当にすみません。

キッド　VS　コナン＆探　の話は書き終わり次第投稿します！！

このままでは、先に進まないと思ったので、先の話の載せることにしました。

白き罪人と蒼き宝石　くバレた正体く

P M ・ 1 0 : 0 0

自宅に近いビルに降り立ち、キッドは素早く快斗に戻る。

「んじゃ帰るか」

笑顔で自宅に帰っていく快斗。

この後、天国から地獄へと落とされるとは・・・

このときの快斗には知るよしもなかった。

家の近くまでくると、快斗は人影を見つける。

（誰だ？こんな時間に・・・）

自宅に近づくにつれ、だんだんとはっきり見えてくる。

5 m前にまできたとき、快斗は驚いた。

快「あ・・・・・・・・青子！？」

青「か・・・黒羽君・・・」

快斗に比べて青子は冷静である。

快「何してんだよ・・・こんなところで・・・」

青「く・・・快斗も今まで何してたの？」

青子も言い馴れた名前で快斗のことを呼ぶ。

お互いが苗字ではなく名前で呼ぶのは三日ぶりであった。

快「は？別にいいだろ・・・」

青「クス・・・」

返ってきた答えに何故か笑みを浮かべる青子

快「な・・・何だよ・・・」

なぜ青子が笑っているのか、全く理解できていない快斗

青「だって・・・言えるわけないよね？こんな所で・・・。」

そう言った後、青子は快斗に歩み寄り・・・

快斗にだけ（周りに人は居ないのだが）に聞こえるように・・・

青「白き罪人となって仕事してました・・・なんてね」
と言った・・・。

快「なっ!？」

観念したら？快斗・・・否・・・

怪盗キッドさん？

快「！！！！！！！！！！」

このとき・・・

快斗は初めて目の前に居る幼馴染が怖いと思った・・・

このときの青子の笑みは・・・

絶対零度の笑みだったのだから・・・

白き罪人と蒼き宝石　くバレた正体く（後書き）

次回も宜しくお願いします！

2011・11・14 Monday 未知

白き罪人と蒼き宝石　く飯にもく（前書き）

キッド VS コナン・探　はもう暫くお待ちください。

先にこちらをどうぞ

白き罪人と蒼き宝石　く飯にもく

「はあ！？何言っただよ？」

ポーカーフェイスで表情を隠しているものの、内心冷や汗を掻いている快斗。

まさか・・・

このタイミングで正体がバレるとは思っていなかったのだ。

しかも・・・

バレた相手は一番知られたくないヒト・・・

「じゃあ何処言つてたの？」

「・・・別に関係ないだろ？」

「・・・まだ誤魔化す気・・・？」

「・・・」

何も言えない・・・。

誤魔化しているのは事実だから・・・。

「・・・そう。分かった・・・。今は何も言わなくていい。で

も・・・何時か話してね・・・？」

「へ・・・？」

「・・・仮にも青子は快斗の幼馴染だよ？・・・快斗が青子に何か隠していることぐらい判るよ・・・」

「！！！」

「ありがとうね、快斗」

（気づかないでいてくれて・・・）

「え・・・？」

「なんとなく・・・もう今日は帰るね。本当はコンビに行くついでになんとなく寄っただけだし。じゃーねー」

「あ、ああ・・・」

走り去っていった青子

その後姿を呆然と見つめる快斗

しかし・・・

快斗は気がつかなかった・・・

青子の本当の目的に・・・

馬鹿だな快斗。青子の家からコンビニまでの道のりに・・・
快斗の家が在るわけないじゃん。

だって・・・

逆方向なんだから・・・

ごめんね？快斗・・・

もう会つのはじねで・・・

最期かもね
・
・
・
・

白き罪人と蒼き宝石　く飯にもく（後書き）

本当は快斗がキッドだということを認めるつもりだったんですけど・

・
なんかこっちの方がいいかな・・・？

と思ったのでまだ快斗は青子に自分がキッドだと認めていません。

次回はやっとコナンや蘭が登場します。

蘭と青子の失踪までもう少しです。

それではまた次回

2011・11・15
未知

今度からは・・・

P・M 10:30

～毛利家～

「コ・ナ・ン・くくくん？」

「え・・・いや・・・えつと・・・」

そつと家を出て、そつと家に帰ってきたコナンを待ち受けていたのは寝ているはずの蘭。

「こんな時間に何処行つてたの!？」

「蘭姉ちゃんもう寝なくていいの?」

「誤魔化す気? コ・ナ・ン・くゝん?」

「……………」

「理由を言ってくるまで、寝ないし寝かさないわよ?」

「……………キッドのところに行つてたんだ……………」

素直に言うコナン。

隠すと後が恐い。

「・・・やっぱり・・・」

「しめんなさい・・・。」

これが毎度のことである。

流石に蘭も諦めたようで・・・

「もうこんな時間に外出ちゃ駄目だからね？」

「うん！解ったよ、蘭姉ちゃん」
（んなわけねーだろ！）

あっさりと許されたコナン。

子供スマイルの裏に笑みを浮かべる。

（あつぶね〜〜〜！！今度からはもっと慎重に行かねーとな・・・）
・・）

そう思いながら風呂に入り、布団を敷くコナン。

(また流されちゃったな……。まっいつか！寝よ寝よ……。)

そう思いつつ、蘭は眠りについた。

～翌日～

「おはよう！蘭姉ちゃん」

「おはよう！コナン君」

いつもの朝。

今日もいつもと同じ一日が始まる。

・・・30分後・・・

「いつてきまーす!」

「おー」

二人はいつもと同じ道のりを歩く。

暫くすると、四人の小学生の内、カチューシャを着けた女の子が此方に手を振っているのが見える。

「コナンく〜ん!!」

勿論小学生四人とは、コナンを除いた少年探偵団である。

コナンも手を振りかえすと、蘭の方を向く。

「行ってくるね!! 蘭姉ちゃん!」

「行ってらっしゃい、コナン君。気をつけるのよ?」

「うーん!」

歩美たちのもとへ走っていくコナンを見て思わず微笑む蘭。

そして、蘭も自分の通う高校に行くために歩を進める。

しかし……

だんだんと蘭は帝丹高校から遠ざかっていく。

蘭の向かう先に・・・

帝丹高校という選択肢はなかった。

ゴメンネ・・・？

そして・・・

ありがとう・・・

もう

会えないかも知れないから・・・

日常が崩壊するまであと少し・・・

今度からは・・・（後書き）

ようやく、蘭が登場しましたー！

次回は江古田高校が舞台ですー！

ではまた次回

2011.11.16

未知

無断欠席 〓江古田高校〓（前書き）

今回はいつもより長めです。

無断欠席　　江古田高校

江古田高校

江古田高校2年B組では、学校中がある話題で持ちきりだった。

―連続女子高生誘拐事件―

ここ1週間で被害者は三名。

皆女子高生で、いずれも登校中に犯行に及んでいる。

そして特徴は・・・

被害者全員が長い黒髪で、それをおろしていること。

2 - Bでもそんな子はいっぱいいる。

・ ・ ・ いや、学校中いっぱいいるだろう。

その内の一人、中森青子が学校に来ていないことに騒ぐ2 - B
クラスメート。

そんな中で呑気な声が響く。

「はよ」

「・・・はよー快斗」

黒羽快斗

青子の幼馴染。

授業中寝ているか屋上でサボるかどちらかの彼。

それでもテストは a l l 1 0 0 点 の学年1位をとる、I
Q 4 0 0 の天才である。

快「何騒いでんだ？朝っぱらから」

ク「・・・・・・・・」

恵「快斗君……。青子知らない？」

快「・・・・・・・・は？俺は知らねーぞ」

素気なく返す快斗。

恵「そっか・・・」

尋ねた恵子の表情は暗かった。

いつもなら誰にも優しく、明るい彼。

ある意味問題児なのだが、男女問わず学校中で大人気だ。

しかし・・・

彼は数日前に変わってしまった・・・

ボーとしてることが多くなり、口数も減った。

その原因は、青子との喧嘩・・・

喧嘩した翌日から問題児行動（遅刻・早退ナドナド・・・）がなくなった。

それは、クラスメートどころか先生達の方が驚いていた。

さらに、青子とも一言も話さないでいることにも酷く驚いていて、ムリヤリ保健室へ連れて行かれたりしていた。

毎日のように“痴話喧嘩”をしていた二人。

休み時間の時もあつたが、ほとんどが授業中だった。

いくら二人を抜き打ちで指名しても喧嘩しながら（走りながら）正解を答えてしまうのであまり意味は無く、何時も見守ることにしていた。

それがパツタリと無くなってしまい、クラスメート（生徒）よりも先生や校長の方が悲しがっているという状況だ。

「HR始めるぞー。席に着けー！」

担任の声とともに一気に静かになるクラスの声。

「……ん？中森が居ない……。誰か聞いてないか？」

ク「・・・・・・・・」

恵「・・・・何も聞いてないです・・・・」

クラスを代表して青子と特に仲のいい恵子が答える。

「そうか・・・・。珍しいな・・・・中森が無断欠席とは・・・・」

探「・・・・可笑的い。無断欠席？彼女が？そんなこと今まで一度も無かったはず・・・・」

赤「・・・・なんか嫌な予感がするわ・・・・。気のせいかしら・・・・？」

快「・・・・・・・・」

「まあHR始めるぞー」

・・・HR終了後・・・

「ねえ・・・やっぱり可笑しくない？青子が無断欠席なんて・・・」

「

「うん・・・。こんなの初めてだよ・・・」

「もしかして・・・やっぱり・・・」

「あの事件に巻き込まれたんじゃない・・・」

「連続女子高生誘拐事件・・・だろ？」

「青子は全ての条件に当てはまるし・・・それに目立つもん」

クラスの女子は青子のことでは話している。

珍しいことに、男子までもが話しに加わっている。

けれど・・・

クラス全員で考えても・・・

それらしい答は、1つしか浮かばなかった・・・

無断欠席 〱江古田高校〱(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1378w/>

あの頃のように、もう一度

2011年11月20日21時39分発行